



青山工房の職場で、洋服ブラシの手植え作業を行う二代目・青山大輔さん。

手植え洋服ブラシの 父子二代の

お気に入りのスーツやコート、
思い出の詰まったセーターなど、いつまでも大切に着たい。
衣類の手入れをこまめに行うと、見た目のつややかさを失わず、美しく着こなせる。
「愛着の一着をいつまでも」という、オトナのための隠れたファッションアイテム。
職人がこだわりぬいた「手植え洋服ブラシ」をご紹介します。

文 鎌田浩章 写真 三原久明

機能性重視の洋服ブラシ

ガラス窓越しに冬の柔らかな陽光
がさしこむ作業場で、手植え洋服ブ
ラシの職人は黙々と手を動かしてい
る。3年前の冬には、父・青山昭次
さんが隣の机でブラシを作ってい
た。いまは息子の^{だすけ}大輔さんが父の跡
を継いでいる。

この手植えブラシ製造・販売の青
山工房に、古い洋服ブラシが残って
いるというので、大輔さんに見せて
もらう。東京の麹町でテラーを営
んでいた曾祖父が使ったものと伝え
られる。時は明治の頃、洋装が日常
生活に取り入れられ、背広やコート

のごみやほこりを払うブラシは「洋
式刷毛」と呼ばれ、珍重されてきた。
それを昭次さんが一世に近しい時を
経て改良を重ね、ふだん使いの機能
性を重視した洋服ブラシへと進化さ
せた。

就職氷河期の時代、大学を卒業し
た大輔さんは、家業に就きたいきさ
つを「父に拾ってもらった」と話す。
修業させる余裕はない、といきなり
戦力として扱われたそうだ。

その時代、昭次さんは問屋に商品
を卸すほかに、百貨店催事の実演販
売へ、全国各地を走り回っていた。
商品は常に足りない状況が続いてい
た。二人いれば、一人が催事に出か
けても、一人は作業に専念でき商品



大輔さんの曾祖父が使用していた明治時代の「洋式刷毛」。

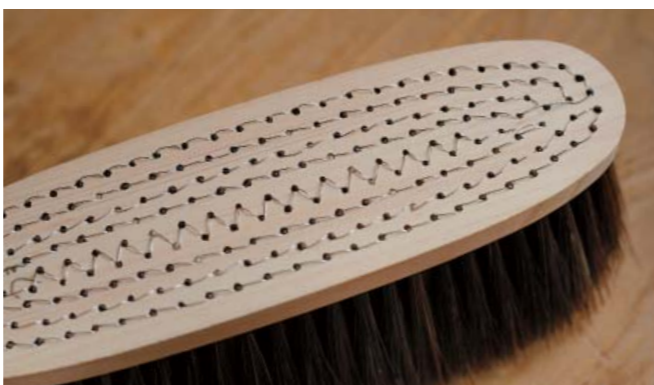
を作れる。そんな目論見もあったの
だろうが、最初の頃は、まったく期
待の戦力にはならなかった。

「失敗の連続で、洋服ブラシを一
日に1個作れませんでしたから。ブ
ラシを作ることはだれでもできま
す。食べていくためには手を早くし
ないといけません。とにかく作り続
ける。父からは『もうやめとけ』と
よく言われましたが、言っている本
人がやめないので作業は続きます。
そうやって5年目に一日に2個、10
年たったなら3個作れるようになって
いました」と大輔さんは話す。気が
つけば、二人三脚で役割分担しなが
ら、20年余りをこの作業場で過ご
していた。

ところで、みなさんは洋服ブラシ
をお持ちだろうか。馬毛の手植え洋
服ブラシとなれば、目にする機会は、
そう多くないかもしれない。

この手植え洋服ブラシ。ウール、
カシミア、シルクなど高級素材の衣
服の手入れに活躍する逸品なのだ。
ブラシの愛用品一つあれば、スーツ、
コート、セーターなど大切な衣類を
気持ちよく自信をもって着こなすこ
とができる。

「洋服ブラシは、ほこりを払う道
具です。強くこすってごみを取るも
のではありません。そうしてブラシ



ブラシの裏側は、ワイヤーが一筆書きのようにめぐらされている。

をやさしくかけることで、洋服の乱
れた毛並みもきちんと整えてくれま
す。生地を傷めることなく、風合い
を生き返らせるには、正しくブラシ
を使うことも重要です。生地にやさ
しくブラシの面をあてて、手首を返
しながらさっと払います。そうすれ
ば、洋服はいつも清潔な状態に保た
れて、見た目のつややかさも変わり
ません」と大輔さん。

受け継がれる繊細な指の感覚

檜ひのきの板の両面には210個の穴が
あいている。そして、万力で固定し

た板の穴にワイヤーを輪っかにして
通し、次に一掴みの毛を半分ほどの
長さのところまでワイヤーにかけた
ら、穴に収まるように裏側から引つ
張り込む。馬毛はちょうどVの字
のような形で穴
の中に収まるこ
とになる。

毛が植わって
いるのを見ると、
それぞれが独立
して植えられて
いるように思え
る。しかし、ブ
ラシを裏返すと、
穴から穴へ馬毛
をワイヤー1本
で縫い合わせて
いることがわか
る。こうするこ
とで毛元も安定
し、動物の毛な
ので切れること
はあっても抜け
ることはない。

また、板にあ
けられた穴は、
何の変哲もなさ
そうだが、そこ
にも職人の技が
生きている。



「いまは催事よりも製作に専念しています」と大輔さん。日高市のふるさと納税の返礼品として、洋服ブラシやハリネズミは人気アイテム。



手植え洋服ブラシに柄をつけていないのは、生地をこするのではなく、払うという動作をしやすくするための配慮から。 青山工房 <http://aoyamakobo.sakura.ne.jp>

はうちにはないので、木工職人さん
にお願いしています」

専門業者から仕入れる原毛は、本
毛と呼ばれる馬の尻尾の部分が使わ
れる。職人は、馬の毛を丹念に櫛くしで
梳き、目についた短い毛や曲がっ
ている毛を取り除いていく。

「洋服ブラシだと昔は豚の毛も多
かったのですが、短いために半分に
折ると、毛先と根元が両方を向き
ます。かたさが安定しないので、ざ
らつとした感触。馬の場合は、毛元
のかたい部分と毛先の弱い部分を
カットして使用しているので、全体



馬の毛を櫛でよく梳き、短い毛や曲がっている毛はよけられる。

が同じ手触りになります。こまやか
でしなやかなのが特徴です」

手植えの作業工程が終わると、次
に蓋になる板をブラシに固定する。
作業は、錐きりで釘を打つ個所に穴をあ
け、真鍮しんちゆうの釘をハンマーで慎重に打
ち付ける。その後は、手植えした毛
を手刈りする作業が待っている。

馬毛を切る特注鋏でシャキシヤキ
という小気味よい音をたてて、両端
に向かってなだらかな弓形を描くよ
うに刈っていく。音を聞いていると
理髪店にいるようだ。カットは調子
がいいときは20分くらいで終わる。



別方向に向いた毛は、ワイヤーを引っ張るとVの字になり、穴に収まる。

調子がわるいと1時間経っても終わ
れない。

明治の仕立屋の洋服ブラシは、毛
先がみな真上を向いているが、平成
の洋服ブラシは放射状に少し毛が外
側に開いている。これは人間工学的
見地から昭次さんが考案したデザイ
ンという。ブラシをかける際に、手
首を返す動作をとまなうが、衣服と
ブラシの毛先の接する部分が効率よ
くほこりを落とす角度になるよう
に、あえて扇状にして丸みを帯びた
形状にしているのだ。

刈りながら、何度も櫛で毛を梳く



鋏の動きに合わせて、毛が膝掛けシートに音をたてて飛び散っていく。

のは毛並みをそろえて、飛び出して
いる毛をカットするため。髪を切る
ときと同じ要領である。この作業を
何十回と繰り返して、「ピンときたと
ころ」でいったん手を止める。

職人は毛並みのシルエットを見
て、毛全体を手のひらで、シャカシャ
カと素早く払う動作をして、ましま
り具合を確認する。商品として出荷
するとき、再度、鋏を入れてしま
うこともしばしばだとか。

仕事を楽しむことも大切

ブラシの機能性や使い勝手は、昭
次さんがすでに高いレベルにまで
もっていかけてくれている。それな
らば大輔さんは新しい路線をめざさ
うと、ユニークな作品づくりにも取り
組んできた。

「中堅の職人グループ『もの型がたり』
に参加しています。父が以前参加し
ていた『生き粋いきいき』という集まりの流
れをくむものです。師匠たちに『お
れたちはお前くらいの年齢のとき
に、すでに作品を持ち寄ってグル
ープレ展をやっていたぞ。お前も何か
始めたらどうだ』とけしかけられて、
弟子たちが中心になり結成しました」

もの型りには、指物師や市松人形
師、木彫職人や染色家もいる。不定

期の会合を重ね、作品のヒントを出
したり、もらったり、お互いに切磋
琢磨してきた。

パソコン用のほこりやごみを払う
商品には、昭次さんの作ったものに
ひと工夫加えた。

「グループ展のときに、札幌で豆
本を製作しているキコキコ商會の末
木さんという方と知り合いました。
その方とコラボを組んで、生まれた
のが『鼻毛おやじ』です。豆本とブ
ラシをセットで、ブラシを作ってみ
ないかと声をかけられたのが発端で
す。

さらに卓上に立てられる状態にし
たかったので、『ハリネズミ』が生
まれました。父が残してくれた小さ
なOA機器用のブラシは、大きく
変身しました。小物類は変化球みた
いなものですが、球種は増やしてい
きたいです。自分も楽しみながら
『お前のところ、ヘンなモノ作っ
てるな』と思われたい(笑)」

青山工房では、手植え洋服ブラシ
以外にもボディブラシ、靴ブラシ、
洗濯ブラシ、網戸用ブラシなど数多
くの商品を製造している。

話は洋服ブラシに戻るが、市販の
毛玉とりや紙に糊のついたローラー
で生地をこすってごみをとるのは、
お気に入りの衣類であれば差し控え

たほうがよいと大輔さんは話す。急
場しのぎにはよくても、長い目で見
ると、生地を傷つけることになり、
大事な一着であればなおさら、日頃
の手入れを大切にしたい。

「出がけにさつとブラシをかける
のも、春先に帰宅して、花粉をその
場で落とすのもけっこうですが、そ
れだけで終わらせず、部屋に戻った
らハンガーにかけた状態でブラシを
かけてあげると生地も息を吹き返
します。とりわけ、乾燥した冬には効
果を発揮します」

父は息子に手植え洋服ブラシの技
を余すところなく残して去った。さ
まざまな職人の世界に目を向けてみ
よ」との方向性も自らの行動で示
していたのかもしれない。そして、「大
輔ワールド」が一歩ずつ己の道を切
り拓いてくる。

「いやいや、そんな特別なことをし
ているわけではないですよ。この世
でひとつ、特別なものを作っている
意識もありません。父のこの仕事が
あったから、大学にも行かせてもら
い、こうして生活できています」と
淡々と話す大輔さんの言葉の裏に、
手植え洋服ブラシ職人としての亡父
への尊敬の念が隠されている。

「またまた、おかげさな」と大輔
さんは笑い飛ばすだろうが…。



ボディブラシにも馬の毛が使われる。柄のついたものやS字型のものなどお好み次第。



豆本とのコラボ作品「鼻毛おやじ」と「ハリネズミ」。パソコンのほこり払いに最適。